課題は隔年結果

不知火は完熟果率を3割に抑える

中村健吾

不知火の無加温ハウス栽培。露地では霜やクラッキングの恐れがあるため1月に収穫するが、無加温ハウスなら3月まで樹上に成らせることができる（JA蒲郡市提供）

不知火（しらぬい）（デコポン）の無加温ハウスにおける完熟栽培（3月収穫）では、通常の1月収穫と比較して、高品質で良食味な果実を生産できます。しかし、樹のすべての果実を3月まで着果させておくと、樹勢低下を招き、翌年以降の着花・着果量の減少が懸念されます。

そこで、熊本県農業研究センター果樹研究所では、連年安定生産が可能な完熟収穫果の割合を明らかにしたので紹介します。

糖度は上がって酸度は低く

試験は、熊本県農業研究センター果樹研究所内に植栽された、無加温ハウス不知火（樹齢24～25年生）を供試し、1月収穫果（通常）と3月収穫果（完熟）の割合を、以下のように設定しました。

①通常1：完熟1（以下、5割区）
②通常7：完熟3（以下、3割区）

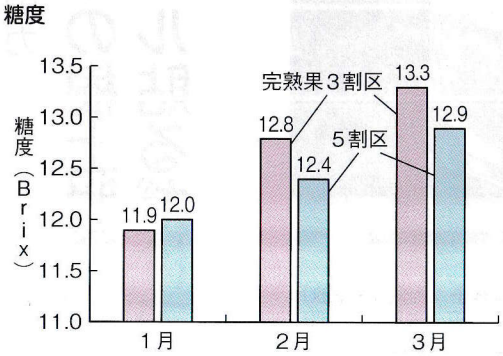
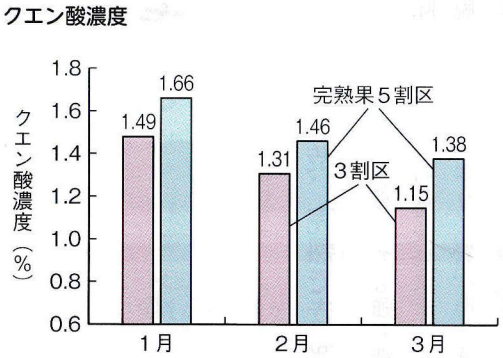
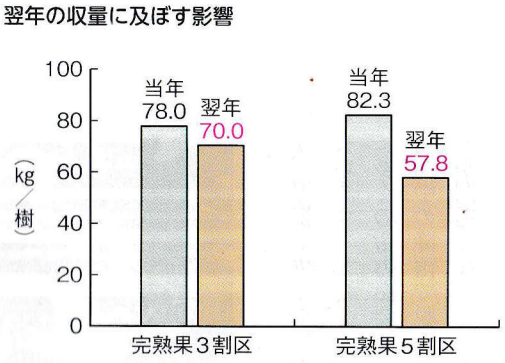
そして、それぞれの区で果実の糖度、酸度、翌年の収量について調査しました。なお、1月に収穫する果実は、樹冠上部や赤道部中心に収穫し、糖度が低く、酸度が高くなりやすい樹冠下部の果実を3月まで残しました。

果実の糖度は、1月収穫果実より3月収穫果実のほうが高くなることがわかりました。着果割合による差をみると、5割区よりも3割区で糖度が上がりやすく、完熟時の糖度が高くなることがわかりました（図）。果実の酸度は、処理区間の差はないものの、3月まで着果させることで1月収穫に比べて低くなります。

また、3割区が5割区と比較して翌年の収量減少が小さくなりました。以上のことから、1月に7割の果実を収穫し、残り3割を3月に完熟果として収穫することで、隔年結果が抑制でき、品質が良好な果実が生産できます。

樹勢を維持する管理も大事

不知火の完熟栽培を行なううえで、連年安定生産はもっとも重要です。そのためには、早期摘果により着果数を制限するとともに、新梢の発生を促す等、樹勢を維持することも大切です。新梢の発生が少ない着果過多樹や樹勢低下樹では、翌年の着果量が大幅に減少し、隔年結果につながりますので、完熟栽培は避けるようにします。

（熊本県農業研究センター）

無加温ハウス栽培不知火における
1樹当たりの完熟果割合と品質・収量の違い